

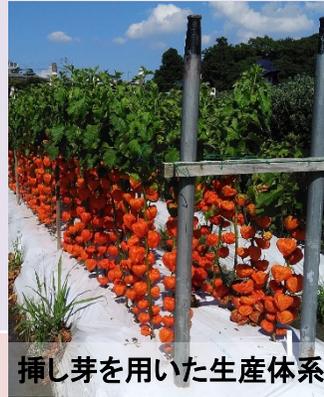
【全体概要】

ホオズキは、お盆に不可欠な商材であり需要は高いものの、産地の高齢化、白絹病の発生等により生産は不安定である。慣行の地下茎を用いた栽培では、地下茎を選別しても白絹病を保菌している場合があり、本圃で白絹病が蔓延する場合も多い。そこで、無菌の新梢を挿し芽して育苗後に定植することで、白絹病の発生を低減できる新しいホオズキ生産体系を確立し、県内各地域での生産振興を図る。

新品種・新技術等の概要

○挿し芽苗を用いたホオズキ生産体系

飯塚普及センター管内において、地上部に発生してきた新梢を防除後に採穂し無菌用土に挿し芽を実施。得られた発根苗を定植して栽培することで良好な切り花長と品質を確保したホオズキを収穫できることを明らかにした(R元年)。



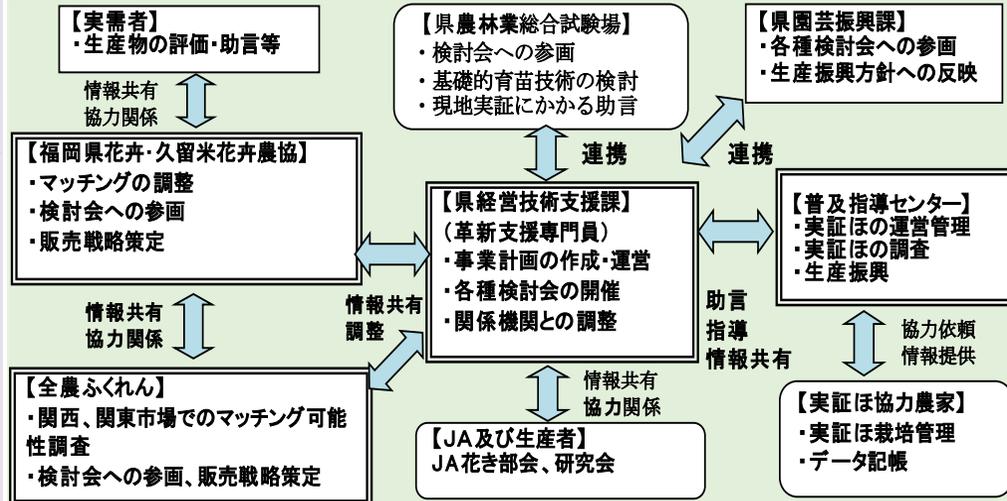
○県内7カ所での栽培実証試験

県内1カ所において育苗試験 及び6カ所で慣行(地下茎)と試験区(挿し芽苗)を用いた栽培実証試験を実施し、切り花形質等を調査。

主な取組内容

- 【実証ほ設置】(7普及センター、7ほ場)
- 【事業検討会・設計・成績検討会】(6月、9月)
実証ほの設計、成績を検討。
- 【プロジェクト会議、現地検討会】(6月～7月、3回)
実証ほ場の実施状況の確認および現地検討会を開催。
- 【実需者との意見交換会】(9月、1回)
福岡県花卉農協、久留米花卉園芸農協、仲卸の各実需者との意見交換会を実施。
- 【先進地調査】(12月)
病害対策の先進研究を実施する九州沖縄農研センターを調査。

実施体制図



課題と今後の対応

【1年目の実証結果】

- ①挿し芽の成苗率は、用土を加温(23℃設定)あるいは挿し穂基部に発根剤を処理することで向上。用土は、種まき培土:ポラ砂(微粒)=1:1が良いことを解明。
- ②挿し芽苗を利用した生産体系の切り花長は、京築管内で90cm以上と2L規格となった。しかし、切り花長70cm以下の試験ほ場が多く、改善が必要であることがわかった。初年度は梅雨明けが7月末と遅く、白絹病は全ての試験地・区において発生しなかった。

【2年目の取組】

- ①育苗および定植時期を早めた現地実証試験を実施。
- ②実需者との意見交換会・普及検討会を実施。